

〔特集〕 集：家族看護とジェンダーロール

## DV とジェンダー問題

雷門メンタルクリニック

田 熊 喜代巳

## はじめに

DV(ドメスティックバイオレンス)という言葉は、欧米において、1970年代半ば、フェミニズム運動の高まりのなかで使われはじめたものであるが、最近になって、マスコミ等でさかんに取り上げられる様になるにつれ、我々にとっても、ようやく馴染みのあるものになりつつあるようである。しかし、ややもするとマスコミ等での好奇心が先行する中で、DVというと、どうしても、殴る、蹴るといった、身体的暴力だけを思い浮かべがちであり、DVについて正しく理解している人は、意外と少ない様に思われる。

DVとは、婚姻関係の有無を問わず、親密な関係にあるパートナーから女性に向けられる、あらゆる種類の暴力のことである。したがって、DVといった時、その中には、いわゆる「身体的暴力」だけでなく、ののしる、脅す、ばかにする、といった「精神的虐待」、生活費を渡さない、仕事をさせないといった「経済的支配」、避妊に協力しない、セックスを強要するといった「性的虐待」も含まれる。また、子供が親を殴るという意味で使われている「家庭内暴力」や、夫婦間に限定される「夫婦間暴力」とは一応区別されて考えられているため、日本でもそのままの言葉で使われている。

さて、DVとは、犯罪である。

人が人を殴る、人が人の人権を無視する、そのこと自体が充分罪に当たることであるとすれば、夫が妻を殴る事も、妻の人権を無視する事も、当然罪になるはずである。それなのに、洋の東西を問わず、夫の、妻に対する虐待は、常に存在していた問題であるに

も関わらず、わずか20年程前まで、それが犯罪としてとらえられてこなかっただけでなく、ほとんど社会問題化されずに来てしまったのは、夫婦げんかは他人の入るものではないという思いや、女は男に従うものである、男は女より強い、あるいは時として偉い存在である、といった価値観が、暗黙のうちに社会に受け入れられてしまっている事と、大きく関係している。

男とはこういうものである、女とはこういうものである、あるいは、男とは、女とは、かくあるべきものである、といった、社会的、文化的性差のことを、「ジェンダー」という。もともと男性は、男らしく育てられる過程で、女性より力強いことを良しとされ、女性は、女らしく育てられる過程で、男性に尽くすことが良い事とされる。従って、尽くす女性が強い男性に力で抑えられてしまうのは、女性の人権を考えた時に全く許されない事であるにもかかわらず、社会の構造上最も陥りやすい、自然な構図なのである。しかし、女性の高学歴化が進み、社会が成熟してくるにつれ、さすがに女性達もその構図の誤りに気付きはじめた。抑えつけられる事に「NO」を言える様になってきた。それが、社会へと向かう運動となり、女性の人権を守るためのフェミニズム運動となつてうねりはじめてきた。その、女性達の粘り強い運動の結果は、1993年12月、国連総会において「女性に対する暴力の撤廃に関する宣言」が、全会一致で採択されるなどの成果となつて実を結びつつある。日本でも、例えば東京都において、2000年3月、「東京都男女平等参画基本条例」が制定されるなど、男女間で行われる暴力的行為の禁止が、法律で規定されるようになってきた。

それならば、今、社会の中で普通に生きている市井の女性達も、自分達の問題に対して、声を上げることができているのであろうか？ 実際、私が都内の保健所で受けている乳幼児健診の心理相談の中で、最近目立って増えているのが、母親の、育児に対するいらいらであり、不安感であるが、それは同時に、女だけが子育てをさせられている事への、向ける先のない怒りのようでもある。そこには、母親なのだから当たり前、あるいは、母親だったら当然こうするべきという、目に見えないプレッシャーを受けながら、しかも、なお厳然と根強い母性神話の中で、自分自身であることを抑え続けながら、ただひとり、日夜闘い続けている母親達の姿が、浮き彫りになってくる。女なら、あるいは母親ならという、ジェンダーにともなう役割(ジェンダーロール)への怒りは、男性から女性への力の押し付けに対する怒りともいえよう。

今回、母親という役割の加わった女性達が、夫とどのような関係をもち、ジェンダーに関してはどう捉えているのか、また、身体的暴力もさることながら、ジェンダーにともなう精神的暴力は、実はかなり一般的に行われているのではないか、そんなことを考えながら、アンケートを実施した。今後、夫婦のあり方を含め、家族の問題を考えていく上でのひとつの見方が提供できれば、と思っている。

## アンケートについて

### 1. 方法

都内4箇所保健所において、1,6才児健診,3才児健診,及び育児相談などに来所した母親達に、当日配布し、その場で回収した。

### 2. 内容

個人的な情報(名前、住所など)は一切聞かずに、まず以下の8項目に対して、

そう思う…5      まあそう思う…4

どちらでもない…3

あまりそう思わない…2      そう思わない…1

の5段階で、答えてもらった。

問1. 食事の支度や掃除、洗濯などの家事は、妻がするのが当然だ。

問2. 男が、家庭より仕事を優先するのは、仕方がない。

問3. 子育ての責任は、ほとんど母親にある。

問4. 夫が家族を養うのは、当然のことである。

問5. 男が強く女が優しいのが理想的な姿だと思う。

問6. 自分の行動は、大体において、夫にチェックされている。

問7. 夫から、人として尊敬されていると思う。

問8. 大切な事は、最終的には夫が決めるものだ。

次に、以下の5項目に対して、

いつも…4      ときどき…3

ほとんどない…2      まったくない…1

の4段階で、答えてもらった。

問9. 夫から殴られたことがある。

問10. 夫に、身体的な特徴を指摘されたりからかわれたりして、いやな思いをした事がある。

問11. 夫からお前はダメだとか、バカだとか言われたことがある。

問12. 子育ての仕方が悪い、と、夫に責められた事がある。

問13. 夫の顔色をうかがっている。

問1~5と問8が、ジェンダーに関する項目、問6、問7と問9~13が、DVに関する項目である。

### 3. 集計方法

項目7以外は、○印のついている数字をそのまま点数として計算し、項目7は、5. 4. 3. 2. 1. を、それぞれ1. 2. 3. 4. 5点として計算した。したがって、DVに関しては、点数の高い方が、虐待を受けている可能性が高いことになる。

### 4. 結果

回収できたアンケートの枚数は、139枚である。

<表1>より、ジェンダー項目に関して

・問1と問5、つまり、家事は妻がやるべきである

表 1.

点数 問	5	4	3	2	1	計
1	7(人) (5.0%)	51 (36.7%)	27 (19.4%)	30 (21.6%)	24 (17.2%)	139
2	27 (19.4%)	67 (48.2%)	24 (17.3%)	15 (10.8%)	6 (4.3%)	139
3	4 (2.9%)	17 (12.2%)	22 (15.8%)	27 (19.4%)	68 (48.9%)	138
4	35 (25.2%)	46 (33.1%)	28 (20.1%)	17 (12.2%)	13 (9.4%)	139
5	14 (10.1%)	34 (24.5%)	51 (36.7%)	17 (12.2%)	23 (16.5%)	139
8	16 (11.5%)	40 (28.5%)	41 (29.5%)	20 (14.4%)	22 (15.8%)	139

表 2.

点数 問	5	4	3	2	1	無回答	計
6	6(人) (4.3%)	13 (9.4%)	32 (23.0%)	37 (26.6%)	50 (36.0%)	1	139
7	6 (4.3%)	17 (12.2%)	61 (43.9%)	45 (32.4%)	10 (7.2%)	0	139
9		0 (0%)	7 (5.0%)	25 (18.0%)	103 (74.1%)	4	139
10		4 (2.9%)	19 (18.0%)	44 (31.7%)	68 (48.9%)	4	139
11		3 (2.2%)	24 (17.3%)	43 (30.9%)	65 (46.8%)	4	139
12		1 (1.0%)	19 (13.7%)	45 (32.4%)	69 (49.6%)	5	139
13		3 (2.2%)	26 (18.7%)	35 (25.2%)	70 (50.4%)	5	139

ということ及び、男が強く女が優しいのが理想であるということに関しては、そう思っている人とそうでない人との割合は、ほぼ半々である。

・問2と問4、つまり、男が仕事を優先させること及び、夫が家族を養うのが当然であるということに関しては、そう思っている人の方が、そうでない人よりはるかに多かった。

・問3に関して、子育ての責任が母親だけにあるわけではないと思っている人(2と1に○印をつけた人)は、95人、割合にして68.3%であった。

・大切なことは夫が決めるものと思っている人はそうでない人より若干多かった。

<表2>より、DV項目に関して

・19人(13.7%)の人が夫に行動をチェックされていると思い、23人(16.5%)の人が、夫から人として

尊敬されていると思えていない。

・身体的暴力に関しては、7人(5.0%)の人が、時々夫から殴られていると答えており、「ほとんどない」を「1度でもある」と考えれば、32人(23.0%)の人が夫からの暴力を体験していることになる。また、全く殴られたことがないと答えた人は、103人(74.1%)であった。

・精神的暴力に関しては、身体的な特徴をからかわれていやな思いをしたことがある人が、「いつも」と「ときどき」をあわせると23人(16.6%)、さらに「1度でもある」をあわせると、67人(48.3%)であった。次に、ダメだとかバカだとかいわれた経験に関しては27人(19.5%)の人が、いつも、あるいはときどきそう言われており、「1度でもある」をあわせると70人(50.4%)になった。

・問12に関しては、20人(14.1%)の人が、いつも、あるいはときどき、子育ての仕方が悪いと夫に責められており、65人(47.1%)の人が、1度でも責められたことがあると答えている。

・問13に関しては、27人(20.9%)の人が、いつも、あるいはときどき、夫の顔をうかがっていると答えている。

### 5. 考察

今回のアンケートでは、23人(16.5%)もの人が夫から尊敬されていると思えていないということや、32人(23.0%)もの人が一度でも夫から殴られているということ、しかしながら、同時に、それが女性の怒りとして表われるまでには至っていないという事が明らかになった。特に、精神的暴力の3つの項目(問10. 問11. 問12.)すべてにおいて、約半数の人がそれを体験しているにもかかわらず、それが、自分が尊敬されていないという認識にまでは結びついていないという事実は、興味深いことである。勿論、わずかこの程度の項目数やアンケートの回収枚数で、DV問題やジェンダー問題を一般化して云々できるとは思っていない。しかし、ここにある回答を現実として受け止めることは、大切である。

いったい、女性の自尊心はどこへいつてしまった

のか？

2～3度殴られたり、バカだといわれたり、子育ての仕方が悪いと責められたりする位のことは、問題にならないことなのだろうか？ 実際、これらのことを、受け流したり聞き流したりすることが、大人だったり、賢かったり、問題の正しい解決方法だったり、という価値観は、かなり一般的に存在する。殴られたり、ばかにされたり、責められたりするのにはそれなりに理由があるのだから、そうされないようにすべきである、という、女性の側の対応を問題にする考え方である。しかし、殴られたり、ばかにされたりには、必ずしも合理的な理由など存在しないし、むしろ存在しないからこそ、妻は夫の機嫌の良し悪しを気にして顔色を見ることになる。男だからというただそれだけで、理由もなく機嫌の悪いことも許され、女はそれに対して何とか上手に対応しなければいけない。そんな考え方が一般的である限り、女性が自ら積極的に物を考えたり何かを判断したりすることは、いつまでたっても難しいし、DVも無くならない。

一方、今回のアンケートからもいえることであるが、家事、育児といった、女性がとるべき、と一般的に思われている役割に関しては、意外に多くの女性達が、とりあえずはその事を受け入れているように思われる。それでもなお、その役割をとっている自分自身に対して、より積極的な評価を持っていないのは、その役割自体に対する世間の評価が一向に高くないからである。一般的な評価の、決して高いとはいえない役割を執りながらなお、夫から責められたり、不機嫌さをぶつけられたりし、しかも、責められる側にその責任があると思っている。そういった女性の姿が、今回のアンケートからも再確認できたといえる。

したがって、女性の自己評価を高めるためには、まずは、女性がとるべきとされている役割に対する世間の評価を高めることであり、さらに、その役割は必ずしも女性だけに期待されるものではないという認識を、ごく普通の考え方として広く普及させること

である。

## まとめ

DVは、強い男性が、生物的な性差である力の差を利用して、弱い女性を支配するという構図であるから、責められるべきは、間違いなく男性である。しかし、ただ男性を責めてだけいても、問題の解決にはならない。DVに至る男性の、心理的、社会的要因や、誘因は何なのか？性役割(ジェンダーロール)との関係はどうか？そういった見方も必要である。

例えば、男は仕事をするのが当然で、家族を養うのも当然で、「主夫」などというのは全く認められず、しかも、グチを言ったりすることは男らしくない、という価値観の中で男性も生きにくさを抱えていることは、想像に難くない。それは、女性が、女ならこうすべきだ、という価値観の中で生きる生きにくさと、本質的にはどこも変わらないが、残念ながら、現在の社会の中でそういった考え方は受け入れられにくい。仕事にのみ関心を向け、仕事に埋没する人生を、好むと好まざるとに関わらず歩まざるを得ない生き方は、当然、大きなストレスを生むことになる。そう考えた時、男性に対するジェンダー問題に関しても、無関心ではいられなくなる。

生物的性(セックス)がある以上、社会、文化的性(ジェンダー)があることはむしろ自然なことである。母親だけに子育てが押し付けられていることが間違っているのであって、母親が子育てをすべきという考えが間違っているのではない。とすれば、ジェンダー問題を考える時に大切なことは、ひとつは、男性が男性として、女性が女性として、十分に尊敬され、認められる必要があるということであり、もうひとつは、男性も女性も、性差をこえて、人として尊敬されるということである。尊敬され、認められないところに、自尊心は育たないし、自尊心の無いところに、相手を尊敬する気持ちなど育たない。ましてや、互いに尊敬しあえない夫婦のもとで、子供の中に人を尊ぶ心を育てること等、不可能なことであろう。

家族を援助するという立場の私達がより良い家族関係をめざす時、男性、女性それぞれの生きにくさを、両性に対するジェンダーロールとの関係で見つめてみることは、とても大切なことである。そして、DV問題を考える時、我々は、身体的暴力だけでなく、より一般的に起こっている精神的暴力に対しても、もつと強い関心を向けるべきである。男性女性それぞれの性役割を尊敬しつつ、しかもそれに縛られない多様な生き方も許容しあえる関係。それを目指すことが、DV問題解決への、ひとつの糸口となる。

#### おわりに

今回のアンケートの対象は、女性、しかも母親のみである。このことを含め、DV問題やジェンダー問題を女性の側からだけ見ることは、問題へのアプロー

チの仕方を一面的にしてしまう危険性があることは、否めない。実際、男性に関して述べる時、裏付けとなる様な男性側からの直接的な声が無いことは、今一つ説得力に欠けることである。しかしながら、健診の場面でさえほとんど父親の姿が無く、父親の声すら集めることが難しい現状では、男性のなまの声を集めることなど、ましてや至難の技である。加えて、弱音を吐くべきではないと思っている男性であれば、心の内に弱音と思われる部分を抱えているとしても、それを表に出す事は難しい。さらに、DVとの関係でいえば、暴力を受けている被害者の声を聞く事に比べて、加害者の声を聞くというのは、はるかに難しいことである。

DV問題やジェンダー問題を、男性の側からの視点も大事にして考えようとする時、男性の正直な声をどのようにしたら集められるか、それは、今後の大きな課題のひとつといえよう。